



街路樹



教材提示の3つのポイント



危機管理の「さしすせそ」

よりよい授業をめざす教師は、授業を構想する際に、次のような子どもの姿を思い描くのではないのでしょうか。
 「目を輝かせながら学ぶ姿」
 「互いの考えを進んで伝え合う姿」
 「『分かった!』『できた!』と喜ぶ姿」など…。
 その一方で、日々の授業を振り返ってみると、このような子どもの姿が見られていたか不安になりませんか。

「授業をつくる16の視点」(福島県教育センター)では、授業を構想する際の第一歩として、問いを引き出す教材提示の工夫について書かれていますので、ご紹介します。

(1) 「実物」(具体物)を生かす

実物を提示したことで、子どもたちの目が輝き、興味・関心を高めることができた経験は多いのではないのでしょうか。時には、見せるだけでなく触らせることで、授業への期待感をより高めることができたことでしょうか。それだけ、実物の持つ魅力は大きいのです。

しかし、実物を見せた後の「今日のめあては、〇〇です」という教師の一方的な一言で、子どもの笑顔が薄れ、先ほど見せた積極的な姿が受け身の姿に変わり、重い雰囲気の中で授業が展開される…。このような経験はないでしょうか。

実物の持つ魅力を最大限に生かすためには、その提示によって、どんな子どものつぶやきや姿を引き出し、それらをどのように学習課題の設定につなげていくのかという教師の意図的な計画が必要なのです。実物の持つ魅力に安易に頼らず、本時の目標と照らし合わせながら、教育的価値を十分に吟味してから提示しましょう。

(2) 「実演」を生かす

子どもの目の前で、「驚き、疑問、矛盾」などの要素を含んだ実演を行い、そこから学習課題の設定につなげていく方法もあります。その際、実演は教師だけという固定的な考えではなく、時には、子ども自身が試してみる活動を仕組むことも必要です。

(3) 「ICT」を生かす

ICTの活用は、子どもの興味・関心や学習意欲を高めたり、授業の効率化を図ったりする上で効果的です。また、文部科学省委託事業「ICTを活用した授業の効果等の調査」によると、授業にICTを活用することによって、学力向上に効果があることも報告されています。

ICTの活用例に

- 写真や図表、資料などを大きく提示する。
- 実際に観察や見学ができない場面などの動画を見せる。
- デジタル教科書・教材やシミュレーションソフトなどを使って提示する。

があげられています。

物理的な機材数の問題や、機材の準備・設置に課題はありますが、教科等の目標を達成するために、積極的に活用してみたいかがでしょうか。

「授業をつくる16の視点」(福島県教育センター)より



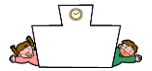
危機管理の原則は、「最悪を想って、慎重にかつ素早く、誠意を持って、組織で対応する。」ことと言われます。つまり

- 「さ」= 最悪を想って
- 「し」= 慎重に
- 「す」= 素早く
- 「せ」= 誠意を持って
- 「そ」= 組織で対応



また、この「さ・し・す・せ・そ」には、

- 「さ」= 最初の対応(初期対応の重要性)
- 「し」= 指揮系統の明確化
- 「す」= 推測で動かない
- 「せ」= 戦略と戦術
- 「そ」= 組織で対応



というように、別のとらえ方もあります。

迅速で的確な初期対応、正確な情報共有に基づいた戦略的かつ誠実な対応、管理職中心の組織対応。これらが機能すれば、ほとんどの場合、重大な事態への発展を防げます。

身近な事例では、児童・生徒の欠席の対応があります。

- ・欠席1日目(担任から家庭への電話連絡)
- ・欠席3日目(担任による家庭訪問)
- ・欠席5日目(職員間で情報共有と作戦会議)

このような最悪を想定しての迅速な対応により、不登校に陥る前に原因を修復し学級へ復帰できた事例もあります。

日常の僅かな変化から、危機を感じ取れる教師としての感性が、子どもを救うのです。

教育相談室より



「離せばわかる」に気づき、老眼鏡を初めて使用し、新聞の字が鮮明に見えた時の感動があります。改善の手立てがうまくいった結果だと思えます。

最近、学期末の二者懇談や三者懇談を受けて、相談に来られるケースが増えています。「書くことが苦手」「集中力がない」など、困っているという様々な訴えが出てきます。

でも、本当に困っているのは子どもです。いつも注意されたり叱責を受けたりすることで、自己評価が下がってしまっているのではないかと懸念されます。

ここからが、老眼鏡のような不都合を改善する、手立て探しです。最初の面談での聴き取りでは、気づきを基にしながら傾聴し、必要であれば発達検査の結果を勘案し、本人の度(困り感、困難さ)に合った手立てを見出します。こうして子どもが学校に行ったら、「勉強したい、楽しいことをしたい」という期待感が持てるよう、先生や保護者がフレームであってほしいと思います。

